
かなたへ 第十八部 冬物語拾遺

U B O B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かなたへ 第十八部 冬物語拾遺

【Nコード】

N5397M

【作者名】

UBOB

【あらすじ】

クリスマスから新春にかけてのサブストーリー集

第1話 国木田君の栗派

第2話 十二月のリング

第3話 谷口君の春

第4話 〽猫、喫茶店、鉛筆〽

第5話 冬の遊園地

第一話 国木田君のクリパ

12月19日 (前書き)

かなたへ 第十七部 雪の季節

<http://ncode.syosetu.com/n1989m/>

の続きです

誰しも腐れ縁と言う物があるだろう、僕の場合は谷口とキヨンがそれに相当するのかな？ 特にキヨンとは中学も同じクラスだったから本当に長いつきあいになる。キヨンと言うのはもちろん本名じゃないのだが、もう誰も本名を覚えていないほど普遍化した固有名詞と化している。見たところは通り一遍の男子高校生、少々ぼやき癖がある以外はあだ名以外に特に変わった特徴が有る奴だとは思っていないかった。強いて言うなら、ちよつと変わった女子に好かれやすいというか、平気で相手をするというか、そういった癖のある、それ以外は平々凡々の人間だったと思う。だが、その些細な癖が僕のクリスマスイブにまで影響をもたらすとは、彼の口癖ではないけれど「やれやれ」って、言いたくなるよね。

実は去年に続き今年のクリスマスイブに彼と、彼の仲間、首謀者は僕のクラスにいる変わり者の美人、涼宮ハルヒって変な名前のクラスメートなんだけど、彼女が主催しているSOS団とかいう、これまた非常識な名前の非公式団体のクリスマスイブのパーティーになんとこの僕まで招待されてしまった。

明日、明後日と学外の全国規模の予備校が主催する大学入試の模擬試験に腕試しに参加する以外、これといって予定がなかった僕は否応なしにそのクリスマスパークティーに参加決定させられてしまった。これだけなら別に楽しんでくれば良いだけの話なんだが、問題は参加するに当たって他の参加メンバーの中からくじ引きで選んだ誰かにクリスマスプレゼントを用意しなくてはならない事なんだ。模擬試験が済むまでは暇がないから、模擬試験終了後に試験会場になっている市のどこかで見繕うしかないかもしれない。え、誰に当たったかって？

籤は引いたんだけど、参加締め切り次第本抽選をするとかで、明日、二十日の昼過ぎにメールで連絡が来ることになっている。

試験の真つ最中にこんなメールを受けるのもどうかと思うけれど、彼らは彼らのスケジュールがあるから諦めるしかないか。

さて、模擬試験に備えて参考書をもう一度見直しておこう。

そうだ、キヨン、風邪気味でボーツとしてるとか言っていたからその前に葛根湯がなにか予防で飲んでおかなくちゃ。体調管理も受験までの大切な注意事項だから気を抜くわけには行かないは塾で耳に聒ができるほど聞かされてるから。

目指せ国立一発合格、目指せエリート街道なんて人前では言えなけれど僕の偽らざる本心だ。何故？ だって親父みたいには絶対なりたくないから、頑張らなくては。

第一話 国木田君のクリパ 12月20日

今日の模擬試験では驚くことが有ったんだ。実は昨日話したキヨン君や僕と同じ中学時代の同級生の佐々木って奴にぱったり出くわしたんだ。こいつも女の癖に妙に理屈っぽいし、自分を『僕』って呼ぶ、変な奴だったんだが、中学時代はキヨンはこいつも結構仲が良かった、というか、一部では公認状態で付き合ってるって噂だったけど、キヨン自身は頭から否定してたわけ。そいつと本当に偶然に同じ試験会場で、しかも列一つ違いの斜め前ってところに座り合わせたんだ。昔からショートカットでそれなりに目立つ娘だったけど、大勢の受験生の中でもぱっと目立ってたから嫌でも気がついてしまった。元同級生としては挨拶ぐらいと思っただけで声を掛けただけが、僕の顔をみるなり『キヨン君はどうしてるかい』なんて聞いてきた。あれだけ仲が良かったのに連絡とかしてないのか、昨日は風邪気味でフラフラしてたぞって言ってやったら『そうなんだ、連絡できなくてね、ありがとう、また教えてくれたまえ』なんて頼まれてしまった。

やっぱりこいつら付き合っていて変な別れ方でもしたんだろうか？まさかとは思っけど、そのうちきっちり問いただしてやるのもおもしろいかな。

あ、なんだか発想が谷口みたいになってきた、こんなんじゃ明日の試験に集中出来ないぞ……

おっと、忘れていた。試験が済んだ後携帯を見たらメール有りになっていたわけ、どうせ谷口が一昨日出来た彼女の惚気話でも送ってきたんだろうか？

おや、違う、一件目は朝比奈さんだ。抽選だって、で、俺の番号が九番か、エースストライカーだな。で、次のメールは長門さんだ。俺が送る相手は五番、だれだっけ？ もう一度朝比奈さんのメールで確認するのか、五番は……キヨンか、男子に贈るのはストレスが

無いからラッキーだな、忘れてなければまた試験が済んでから考えよう。

第一話 国木田君のクリパ 12月21日

また今日の試験会場でも佐々木さんに驚かされた。僕が試験場に入りペンと受験票を出していると待っていたかのように佐々木さんが僕の所へやってきた。キヨンの様子を心配して聞きに来たようだ。この事、谷口には教えてやろうか、でもあいつは今舞い上がってるから何教えても上の空だろうな。僕は佐々木に頼まれてキヨンにメールをして様子を聞いておくと言うことで解放してもらった。大急ぎでメールを送信すると電源を切つて携帯を鞆にしまう。

昼休みに弁当を食べているとまた佐々木さんがやってきた。慌てて携帯を取り出して電源を入れ、メールを確認するとキヨンから返事が来ている。

何だつて、心配してくれて済まないだつて、いや、これは俺が心配したんじゃないんだから。

僕は佐々木さんにキヨンがインフルエンザで昨日まで倒れていて今日もまだフラフラしていると返事が来たことを教えると礼を言われてしまった。周りで同じく弁当を食べてるやつらに胡散臭そうに見られたのは絶対キヨンのせいだからな。しかし、そういえばキヨンにクリスマスプレゼントをしなくちゃいけないんだつた。

此はこれで滅入る展開だったのかもしれないと今更気づく。

さつさと午後の試験を終わらせたら帰って久しぶりにゆっくり寝たい、それが僕のささやかな望みだ。

第一話 国木田君のクリパ 12月22日

今日は二期の終業式、教室の掃除の後成績表が配られたんだけど、インフルエンザで休んでるキョン君の成績表は頼まれたからと行って涼宮さんが受け取っていた。いくらなんでも代理で受け取ってくれなんて頼むかな。余程成績に自信があつたとしても人に受け取ってもらうなんて考えられないよ。谷口君は朝からハイテンションですつごく機嫌が良かった、散々タイプのデートのプランを聞かされた僕としてはその話しの前に成績表をちゃんと確認すべきだとおもっただけど、谷口君ったら開きもしないで鞆に直行、あの調子だと三学期まで成績表を鞆で寝かせるつもりかもしれない。帰りがけに一年生の陸奥さんが谷口を訪ねてきて、例のクリスマスパークイーに是非参加してれないかって頼んでたのに彼ったら一蹴してた、前は陸奥さんの大ファンだとか散々言っていた癖に、彼女ができたとなんにあの態度の変化はまったく信じられないよ。断るにしてももう少し言い方があるのにね、あんなのだから直ぐ女の子に嫌われちゃうのが分からないのかな。ま、僕もあんまり人のことは言えないんだけどね、そりゃ、女の子をみて可愛いなと思うことはあるけど、受験が済むまでは付き合ったら付き合ったで時間とられたり、むしろ面倒だろうなって思っちゃう。

谷口君とか、キョン君とかに言わせたら異常だって言うんだけど、そうなのかな、なんだか自信なくしちゃうな。

第一話 国木田君のクリパ 12月23日 / 24日

冬休みの初日、昨日立てたプランで休み明けテストの準備にかか
る。明日の夜は涼宮さん達と付き合わないといけないから今日はす
こし余分にやらないと。

12月24日

夕方、クリスマスパーティーのプレゼントを買いに少し早く駅前
の本屋にやってきた。結局僕はキョン君にビジネス手帳を贈ること
にした。彼ったらいつも無計画に行動しては墓穴を掘ってるから、
少しは予定をたてた方が良いかなって思ったんだ。彼、ちゃんと僕
の気持ちを理解してくれるかな？

ついでに面白そうな漢文の参考書をみつけたのでそれも購入。時
間が少しあったから散歩しようと思って駅にいったら谷口とばった
り出会った。

これからデートなのかって聞いたら胸ぐらを怒って掴んでくるか
ら引いちゃったよ。

なだめて訳をきいてやったら、彼女からさっき、前の彼と撚りが
もどったからバイバイってメールが来たんだって。

でっかい薔薇の花束とプレゼント抱えて呆然としてたのはそれで
なんだね。今から涼宮さん達のクリスマスパーティーに行くから一
緒に行かないかってさそったら、一度断ったからって柄にもなくウ
ジウジしてるんだ。キョンに今から参加して良いかってメールして
みろって言ったら渋々メールしてた。

これ、後からキョンに聞いたんだけど、キョン達は絶対谷口が振
られて暇になるはず多って読みで出席者のリストに最初から入れて
いたんだって。だもんで、結局谷口も花束抱えて一緒にあのSOS
団の部室に向かったんだ。

パーティーは楽しかったよ。キョンもすっかり元気になって今年もトナカイのコスプレなんかしてた、陸奥さんも一緒になってトナカイを楽しそうにしてた。見ている僕も楽しかった。帰りには雪までが積もり始め、僕に非日常の一時をくれた本当に素敵なクリスマスパーティーだった。

第二話 十二月のリング

降り始めた雪の中、玄関前のエントランスに向うと停車していた黒塗りのタクシー後部座席の扉が白い手袋をした新川さんの手でさつと開かれました。

「お待ちしております」

僕は軽く一礼するライオンのぬいぐるみを抱き占めた朝比奈さんと共にタクシーの暖かな車内に乗り込みます。行く先を告げる事も無くチカチカとウインカーを付けると車は静かに発車しました。

「朝比奈さん、枕、ありがとうございます。おかげでグッスリと眠れそうです。そのライオンのぬいぐるみも可愛いですね」

「はい、長門さんからこんなに可愛いもの頂けるなんて、悪いですけど思っただけです。それにキョン君が元気になってくれて本当に良かった。色々大変だったけど、今年のクリスマス、本当に楽しかったです」

確かに今年の出来事は去年のように我々の全くの届かないところで不測の事態が起きるよりはよほどマシと言えるでしょう。ですが、彼が長門さんや陸奥さんと親しくなり過ぎていたのではと心配した事も有りましたが夏以降は多少は彼も自覚したのか涼宮さんを蔑ろにする事も無く概ね安定したと思っただけに今回の佐々木さんの介入に端を発した一連の出来事にはヒヤリとさせられました。しかし未来人勢力はこの事についてあまり認識は無い物と見て良いでしょう。

朝比奈さんが今日のパーティーの感想を述べておられるのに適当に相槌を打ちながら報告すべき内容に付いて頭の中を整理しているといった間にか車は朝比奈さんのマンションに到着していました。

「じゃ、古泉君、送っていただきありがとうございました」

そう言いながら手を振ってくださる朝比奈さんに車の窓越しに頭を下げると車は再び発進しました。

「相当疲れておられる様子ですね」

「新川さん、申し訳ありません」

「いえ、すっかり上の空のご様子でしたから。若い頃の私ならあのような可愛いお嬢さんが横に居られたら他の事を考える余裕は無かったと思います。流石に大物ですな」

「からかわないで下さい、僕にはもとよりそんなつもりもありませんし、今日は本当に疲れているだけですから」

「ですが、森さんの前で先ほどの様な様子ですと……」

考えただけでも恐ろしい、僕は新川さんの言葉に思わず首を竦めざるを得ませんでした。

半地下の駐車場のシャッターが小さくカラカラと音をたてて上がり、車は急な勾配を下って所定の位置に滑り込みます。車のヘッドライトも消え、真つ暗な中再び駐車場のシャッターが下りていくのを待つ少しの時間に僕は新川さんに言われるまでもなくもう大きく息を吸い込むとスイッチを入れ替えました。シャッターが閉じきるとガレージ内に蛍光灯が瞬きながら点灯し、その明かりに導かれてエレベーターに乗り込みます。五階と六階の間、メインテナンスフロアに止まったエレベーターから降りるとオレンジ色の明かりで照らされた通路を通り高圧危険と描かれた黄色い扉を開き、そこにあったダミーの電源回路をのパネルを横にスライドさせて入った部屋で待っていたチーフのもとに出頭しました。

「ただいま戻りました」

「古泉、報告を」

求めに従い、昼の定時報告以降の出来事について簡潔に報告を行います。

「新川、補足する事は」

「先ほど古泉が申しましたジュニア部の支部長を任せられた彼の妹嬢を自宅まで送らせて頂きましたがこの際にも特に報告すべき事柄はございませんでした」

「よろしい、古泉、明日の朝までの報告を文書にまとめて提出する

こと。状態は改善していますが昨日までの状況を鑑みて緊急出動に備えて置きなさい。以上。

では、新川さん、古泉、お茶にしましょう」

とたんに張り詰めていたその場の空気が和みました。ほっとため息が漏れます。

「森さん、今夜は私にお茶の用意をさせてください、この衣装ですから」

「古泉、似合っていますよ」

「お嬢様、滅相もございません」

僕はそう言うとお二人の前にソーサーに乗せたホットミルクで半分満たされティーカップをセットするとその中にタイミングよく濃いめに淹れた紅茶を注ぎ、そしてそれぞれの横に小さな緑色に金と赤の模様のついた包装紙に包まれた小箱を添えました。

「メリークリスマス。お世話になっている僕からの気持ちです。どうかお受け取り下さい」

「まあ、古泉、去年のことなどすっかり忘れていたのに、ありがとう、開けて良いかしら」

「私にまでいただけるのですか、勿体のうございますがお気持ち故、開けさせて頂きます」

僕はお二人を前に自分に用意したカップにゆっくりと紅茶を注ぎゆったりとしたソファの腰を下ろしました。

あれは去年のクリスマス会の後の事でした、涼宮さんばかりに気を取られ長門さんに起こっていた僅かな異変の兆候を結果的に見落

としていた僕の失態の責を問う本部から糾弾と処分命令を森さんが本部に出向いて弁明抗議し撤回させてくださった事を僕が知ったのは。身も心もボロボロに疲れ果てて帰ってこられた森さんから事情を聞いた僕は次のクリスマスには必ずプレゼントさせてくださいとお願ひしたのです。

「このリングは、銀製ですな。綺麗、よくこんなの見つけたわね」
「私にはタイプピンですか、ありがとうございます」

僕が森さんに贈ったのは銀製のリング、といっても指輪ではありません。チーフリングといってスカーフを襟元で止めるシンプルなリングです。そして新川さんには同じく銀製のこれもきわめてシンプルなタイプピンです。

「今の僕はまだまだ銀だと認識しています、自らを金に、プラチナに磨いていくつもりです、それまで、どうか宜しくお願ひします」
僕がそういつて頭を下げると、すつと森さんが僕の横にこられまして。

「ありがとう、成長したわね、古泉くん」

森さんそう言うとき最高のクリスマスプレゼントを僕に下さいました。何か、ですって？　いいえ、形の有る物ではありません。そう、僕の頬に小さくキスをプレゼントしてれたのでした。

第三話 谷口君の春 第1節

俺は薄っぺらな鞆をぶら下げてトボトボと図書館へ向かっていた。別に読みたい本や借りたい本が有る訳じゃない。正月が空けたばかりだというのに他に行きたいところが無いわけでもない。これは止むにやまれずという究極の選択の結果なのだ。

忘却の彼方に忘れ去りたい去年のクリスマスを巡るトラウマにげっそりとしている俺を見た親父がとんでも無いことを思いつきやがったんだ。つまりはだな、俺が二学期の成績が悪くて落ち込んでいると勝手に誤解したわけで、親父に押さえつけられて仕方なく鞆の奥から引っ張り出した成績表は最高が体育の7、後は大きく開いて2、3、4、時々5というまあ実にすっきりとした成績が並んでいた訳だ。受け取らされた時に開きもしなかったのでその時そいつを初めて目にした俺だってビックリだが親父、お袋は……暫く無言だったな。親父に言わせるとお袋はその夜泣いていたらしい。知るか、そんなもの。鬱陶しいわい。

で、元旦には何処の予備校に行くかという選択を迫られたあげく、予備校の書類を取り寄せる間は図書館にでも行って勉強してこいと放り出された訳だ。

どこかのゲーセンにでしけ込もうかとも思ったが、とりあえずどんな所だったと聞かれても困るので今日だけとは思って図書館に向かっているわけだ。僅かばかりのお年玉も予備校代にするとかで没収されちまったから昼飯代に渡された僅かばかりの小銭だけじゃ遊びにも行けやしないってのも有るがな。

図書館にたどり着くと開館時刻を僅かに回った所だった。こんな所に来るのかこれほど恥ずかしいとは思わなかったが、それでも顔が引きつりそうになるのを必死にこらえて閲覧室って所のドアを開けた。少々暖かすぎるんじゃないかっていうその室温ばかりじゃ

ない、ずらりと並んだ紺色や黒い服をきた学生の集団に度肝を抜かれた。すでに机は殆ど満席に近い。一瞬、良い言い訳が出来た、諦めて帰ろうかとも思ったが、それでも思い直し室内に入り空いた場所を探す。書架の影、窓から離れて少々薄暗い一角に空いた四人がけの机を見つけ、俺はその一角に腰をおろした。

しんと静まりかえった中で微かに鉛筆を走らせる音、ページをめくる音。ほんの時折場違いな嬌声が聞こえるが、それも直ぐ『シーッ』と遮る声に制止されるだ。そうだ、嬌声は止めてくれ。嬉しそうにおれにまわりついていたあいつの事を思い出しちまうじゃないか。

俺は雰囲気飲まれるように持って来た数学の参考書とレポート用紙を広げ数1の最初、中学数学の復習の所から勉強を開始した。何故かって？俺だって自覚が無かった訳じゃない。どこで躓いたのかと聞かれれば、俺は正直に『最初』と返答するのに吝かではない。高校に入って最初の日の数学の試験で散々な点数を取った俺は、そこで全てを忘れて楽しむ事に決めたんだ。どうせ俺は最初から駄目だ、ってな。

暫く計算問題に没頭しているとふと横に人の気配がして目を上げた。そこには三人連れの中学生のおなによこが立っていたわけだ。

「あの、ここ、良いですか？」

一人の子が俺に向かってそう言った、一瞬何の事だから解らずにいた俺はさぞ馬鹿に見えたことだろう。

「良ければ、使わせて貰って良いですか？」

その子がもう一度訪ねた。漸く状況を理解した俺は、

「どうぞ、空いてます」

そう言って隣の椅子に乘せていたコートを足元の鞆の上に置き、広げていた計算用紙を手早くとりまとめた。

焦ったぜ、俺に声を掛けた子、眼鏡の奥から優しいキラキラとした瞳で俺を見つめてるんだから。なんて色の白い子なんだ。その子

は俺の向かいの席に腰掛け、後の二人は俺の隣とその向かいに座るとひそひそと何やら言葉を交わして勉強を始めた。

俺の頬が熱くなってるのが自分でもわかる、この子、可愛いってより、絶対凄い美人になる。と、図書館って、良いんじゃないか？でも柄にもなく恥ずかしくて俺は顔をあげることも出来ず結局午前中一杯数学に集中する羽目になっちまった。昼前になると俺はノート、参考書、レポート用紙を閉じてそこに置いたまま席を立った、飯、喰わなくっちゃな。

図書館を出た俺は近くのコンビニへ弁当でもと向かった、おや、俺の前を歩いてるのは、あの長門だよな。あいつも図書館に居たのか。気がつかなかったぜ。俺はそれとなく長門の様子を伺いながら腹に溜まりそうな弁当を探す。何時もならニンニクたっぷりスタミナ系を買うところだが、敢えてそこらは外してカツカレーにする。コーヒーも籠に入れ、レジで暖めて貰っている横で長門はがつりとおでんを買っている、意外な物を喰うんだな、知らなかった。大盛りのご飯と大量のおでんをぶら下げて歩く長門の後を追いかける様にして再び図書館に戻る。俺が一階のフリースペースの椅子に腰掛けてレジ袋からカレーを取り出すと長門も隣に座っておもむろに飯を食い始めた。

「よ、よう。奇遇だな」

「……面白い人……」

一言そう返すと何時もの制服姿の長門は黙々とおでんに向かい始めた。無口キヤラから一言貰っただけでも良しとするか、こいつが何か喋ったら良いことがあるとかって噂も有るぐらいだからな。弁当を食い終わり、ポケットのティッシュで丹念に口の周りを拭いてからコンビニ弁当の殻をゴミ箱に捨てると俺は再び二階の閲覧室に戻った。何故かここへも長門が一緒に付いて来る。俺は長門に手を振ると奥の自分の座席に戻った。

戻るとあの子達も飯にでも行っただろう、それぞれの荷物を置

いたままで姿が見えない。ほっとした俺は数学を仕舞うと英語の参考書に取りかかることにした。何だと、過去分詞？ それって旨いのかい？ 俺が雲丹になっちまった脳みそを休ませようと目を瞑って天井を仰いでいると例のおにやのこ達が戻ってきた。ふっと座り直して目を開けると三人そろって俺を面白そうに見ている。はて？ カレーは顔に付いてないと思うぞ？ ポケットからティッシュを引っ張り出してもう一度口の周りを拭こうとすると、三人は小さくそろって合図をすると一斉にこう尋ねた。

「さっきの人、彼女ですか？ 場所、変りましょうか？」
「は、はあ？ 俺は雲丹になった脳みそをほじくり返して再起動をかける、何の事だ？ しばらく考えたあげくふっと合点がいく、長門と一緒に居るところを見られたに違いない。」

「いいや、単なる知り合い、唯の同級生だ。俺には彼女なんて居ない！」

勢いあまつて断言した俺に揃ってクスツと笑うおにやのこ達。

「あの、進学校の北高の方ですよ、私達、今度北高、受験するんです。良かったら、教えて貰えないですか？」

「お、俺に？ まて、これは千載一遇のチャンスってものじゃないのか？」

「お、俺でよければ、今度受験の時の資料もつてきて教えてやる」
確か捨ててなかったはずだ。

「これ、俺の携帯番号とメールアドレス、何時でも相談のるから、遠慮しないで良いぞ」

俺はレポート用紙に震える手でメモするとその子達に渡した。

「ただだよ、今聞かれたら俺、馬鹿なの丸わかりじゃねえか。」

「ちよつと、よ、予備校の授業があつてな、今日は帰るけど。明日また来るから、じゃ、じゃな」

俺は大急ぎで荷物をまとめて呆然と見送るやつらに手を振ると家へと急いだ。

明日までに受験した時のレベルまで戻るか？ 中学までは俺だっ

てそう成績が悪くはなかったんだからな。

第三話 谷口君の春 第2節

俺は家に戻ると必死になつて家捜しを始めた。中学卒業から高校入試、一年生あたりのプリントや資料はどこかの段ボールに放り込んだはずだ。改めて漁ってみると俺の部屋にある雑誌やコミックの多さに我ながら辟易とする。見てる時は楽しかったんだが、いざ勉強の道具を探すのにこれほど邪魔になるとはな。

眼鏡の奥から嬉しそうにキラキラと俺をのぞき込んだあいつの眼差しがやけに眩しい。お、俺、またあいつに会いたい。あいつと話がしたい。少しでも側に居たい。どうしちまったんだ、俺？ その時、俺の小遣いにはジューズ一本あいつに奢つてやるだけの余裕も無いことに気がついた。ついでだ、このコミックとか、売り払つてくらあ。

ついでとばかりに雑誌は紐で括り、コミックは紙袋に詰めていく。いつもの片付けなら途中で雑誌を読み始めちまうところだが今日はかりは明日までにやって置かなくちゃならない事があるから必死だ。結局30分ばかり探して目当ての段ボールにたどり着いた。高校入学の時の書類の袋なんてのも見つかった。袋をあけると見覚えのない藁半紙を閉じた冊子が目にとまる。こんなもの有ったつけ？

「高校数学へのステップアップ問題集」、入学までにやっておくようにと付記されている。

最初のページを開いてみる、チャンチャラ易しい問題だぜ。そうだ、思い出した。こんなの俺様には必要ねえって、そのまま忘れちゃったんだ。

ページをめくってみるにつれてじつとりと手に汗が滲んできた。脇の下にも嫌な汗が流れる。易しいのは最初の1ページ目だけだったんだ。騙された、ってか、悪いのは全部俺じゃねえか！

最初の授業での数学の試験問題を引つ張り出して確認する。全部この問題集に載つてる問題だ。クソ、恥ずかしくて顔が真っ赤にな

るぜ。公立高校入試問題のレベルじゃねえ、こいつらは難関高校の入試問題のレベルの計算問題だったんだ。

俺が古本屋にコミックを売り払って帰ってくるとお袋がブツブツなんぞ言っている、とりあえず無視して部屋に籠もると中学時代の参考書に目を通し始める。待て、こんなはずじゃない、中学つてもっと易しかったんじゃないのか？ 冷や汗をかきながら図形の証明問題に取りかかる。くそ、全く勘が鈍ってる。えい、一年から全部やり直した。俺はその日、それこそ取り憑かれたように勉強した。食卓で飯を食いながら数学の問題を解いたなんて生まれて初めてだったに違いない。参考書、三冊、三年分をやり終えたのは明け方に近い頃だった。このまま寝ちまったら朝起きれない。シャワーを浴びて着替えると英語に取りかかる。数学で懲りた俺は中学一年の参考書から読み始める。え、嘘、そうだったのか…… 所々にあるコラムの豆知識の説明にこれまた冷や汗が出る。よくこんな学力で高校に受かったものだ。

ふっと気が遠くなりそうになるとあの眼鏡の子の姿が瞼に浮かぶ、畜生、俺はあいつに頼りたいんだ。

とうとう俺は完全徹夜で朝飯を食っている。もちろん中三の英語の参考書を片手にだ。仕事に出かける親父から数冊の予備校のパンフレットの袋を渡された。

「今日からでも行けるのはこれと、これだ。どっちか自分で選べ」
ばらばらとパンフを捲る。進度に合わせて受講できる衛星なんたらって予備校の方が時間が自由になりそうだ。場所も図書館に近い。「こつち」

俺はそう言う参考書の続きに取りかかる。お、もうこんな時間か、早めに行かないと席が取れないからな。俺は予備校の申し込み書なんぞの書類を持たされ、今日から受講するようにと念を押されて家を出た。

い、急がなくちゃ。

第三話 谷口君の春 第3節

俺は開館前の図書館つてものに始めて来たわけだ。二人並びの列が図書館の玄関から植え込みを回って歩道まで繋がっている。昨日の三人連れらしいき姿を首を伸ばして探してみるが見つからない。仕方なく最後尾に並ぶ。徹夜明けで少々ハイになっているから寒さそのものはあまり気にならない。むしろ、その、何だな。清々しいってのはこんな気分の事じゃないのか？

開館時刻が過ぎ漸く列が動き出した。人間つてのはたつた一日で慣れちまうものなんだよな。今日は昨日ほど恥ずかしい思いもせず前列に連なって閲覧室に入る。バタバタと席が埋まっていく。俺は昨日の場所を探して奥の方へと歩いていった。良かった、空いてた。俺は昨日の場所に荷物を置くとノート、レポート用紙、辞書を空いた三つの席にササツと置く。中学の時の理科の参考書を置くと携帯を取り出しマナーモードに設定し、はたと気づいた。彼女達から一切連絡が無いじゃないか？ おい、俺、舞い上がってたけど、ひょっとしてとんでも無い勘違い？ 着信履歴も、メールボックスにも何も入っていない。

ハイになっていた気持ちですうっと沈んでいく一方で何故かヘラヘラと引きつった笑顔になっているのが分かる。結構俺、キモイ状態？ 妙な気合いを入れながら昨日の続きの数学1にとりかかる。ふわふわソワソワした妙な感じ。何度読み返しても式が頭に入っていない。オレハコワレテルゼー！

不毛な時間をすごしていた俺は書架の陰から覗く人影にふと気がついた、あれは、昨日の子の一人、確か俺の横に座っていた子だ。俺は慌てて机の上に置いていた辞書やらレポート用紙やらを引っ込めてあわててそいつをみてうんうんと頷く。そいつはにこつとすると書架の陰へと振り向き、例の三人組が現れた。

「わあ、場所取っておいてくれたの？ 来たら一杯だったから、も

う、チ力が遅いんだから」

俺の前に座っていたあの子が右手を立ててしきりにゴメンをしている。やっぱ、すんげー美人じゃね？ お、俺見てニコツとした、ああ、俺、死んじゃうかも知れないぞ。すんげードキドキする。チ力っていうんだ、なんだか可愛い名前、チ力、チ力、チ力……うう、堪らん。

「……か、わかんないんですけど」

え？ 隣の子が何か言ってる、なんだ、理科の問題じゃないか。あ、これか。これはだな、二つのボンベを繋いだら中がこっちからこっちへ全部移る様な気がするんだろ？ けどな、中の気体は圧力、分かるよな？ 圧力が高い方から低い方に移るんだけど、両方の圧力が同じになった所で気体の動きはとまっちゃうんだ。だからこっちのボンベにも残ってる。うん、そうそう、だから両方のボンベの容積を足したものと圧力をかけて、そうだ……」

ヒソヒソ声で話す物だから他の子も近くに寄ってくる、向かいの席のチ力って子は俺の横から覗き込んで、あう、こんなに近くで見ても肌が超綺麗、透き通る見たいにキラキラして、ほんのり頬がピンクで、化粧とかしてないよな、それでこっだけ綺麗って、ああ、柔らかかそうなほっぺた、ちよつと触りたいけど、うう……お、隣の子が式を書いてる、集中しないと俺が間違えちゃう。

「うん、そう、それでやってごらんよ」

少々上ずった声なのが自分でもわかる。脇の下を文字通り冷や汗が滴り落ちる。

「あ、はい、やってみます」

「あ、それ、私も分からなかったとこ、先生に聞いてもちゃんと教えてくれなかったんだよ。じゃ、今度わたし、良いですか」

「ああ、中学の事とか忘れちゃってかもしれないけど、一緒に考えようぜ」

「英語、良いですが？ このところ分からないんです」

良かった、これ今朝丁度見たところだ。

「これはだな……」

その後も三人入れ替わりに色々聞いてきた、最初はチカって子が気になってたけどそのうち真剣に考えないと答えられなくなってきたりして、最後のころは結構俺も汗だく。昨日は下向いてよく分からなかったというか、チカって子ばかりに目がいつて気がつかなかったけどよく見たらどの子もそれぞれ結構可愛い。分からない事があつたら携帯でメールしてくれて言つたら結局三人ともメールアドレスと電話番号を俺の携帯に入れてくれたりして、マジで俺、春が来たかもしれないぞ。もう、図書館、最高！！

彼女達は昼は弁当を持って来ているとかで俺は今日も近くのコンビニへ昼飯を買いに出た。コンビニには今日も長門が来てる、隣は、キヨンじゃないか。涼宮に隠れて長門とデートでもしてるのか？

今日の俺は心が広いから別にチクったりするつもりは無いがな。

「よ、キヨン、お前も図書館か？」

「どうだ、谷口、調子が出てるか？ お前にも三年に上がって貰わないと困るんだな」

はい？ 何故にキヨンがそんな事を言うんだ？ 俺の成績、そんなにヤバかったっけ？

脇の下に再び冷たい汗が流れた。

「キヨン、お前なんでそんな事言うんだ？ お前、最近成績が上がったからってあんまり俺の事を馬鹿にするなよな」

「済まん、そんな積もりじゃないんだ。せつかく一年、二年と同じクラスで来たんだから、来年も一緒にになりたいと思ったただけ。他意はない、本当に済まん」

「そ、そうなら良いんだけどよ。なんだ、長門とデートか？」

「デート？ いや、ちょっと図書館に気になることが有ってな。それに長門に頼み事をしてたのでちょっと寄っただけだ。な、長門」

「プランは順調に進行している。問題ない」

お、長門が結構喋ったじゃないか、またまた良いことが有るかもな。

「おまえ、クリパでかなたから幸運のボールペン貰ったんだろ。それ、御利益があるから大事にしとけよ」

確かに昨日もこれ、身につけてたな。ま、別に信じてる分けじゃないが縁起物は嫌いじゃないからな。それならくれた陸奥さんに一言礼を言わねばなるまい。

「陸奥さんってよく長門と一緒に居たりするみたいなのに今日は姿が見えないな、どうしたんだ？」

「ああ、あいつはクリパの後、ちよと用があつて遠方に旅行してる。ありがとう、元気にしてるから心配ない」

「なんだ、キヨン、妙に詳しいな、あんまり他の子に目移りしてる。と涼宮に刺されるぞ」

「馬鹿、べ、別に俺とハルヒはだな……」

図星だったのかキヨンが必死になつて否定している。何時もならもう少し突っ込んでやるところだが今日の俺は心が広いんだ。見逃してやる事にする。

「良いつて事よ、じゃ、俺、ちよつと忙しいんでな」

キヨンの野郎、まだ何か言いたそうだったが俺は予備校にも行かないといけないから余り時間が無いんだ、弁解を続けるキヨンに手をふる俺はその場を後にした。さ、図書館に戻るぞ。

俺は図書館に戻つてさつさと昼飯を済ませるとトイレで顔を洗つて閲覧室に戻る。胸のポケットに入れていた陸奥さんからのクリスマスプレゼントのボールペンを引っ張り出して見る。結構高そうな高級品だよな、そう言えば、これ、幸運の黄色のボールペンだとか言つてたし、本当に意外と御利益が有るのかもしれない。ボールペンをポケットに仕舞い朝からやるつもりだったのにあの子達の相手をしていた手つかずだった数学1にとりかかる。そうだよな、真面目に公式とか覚えないとダメなんだよな、あの子らに覚えろつて言つて俺が覚えていなかったら話にならないからな。

そうこうしている内に三人そろって戻ってきた。

「あ、もう飯喰ってきたのか？ 早かったな」

「あ、すいません、昼からは邪魔しませんから、頑張ってください」

「お、おう、ありがとな。三人とも理解早いし、入試は絶対大丈夫だと思うけど、それでもお前達も頑張れよ」

俺は三時前に荷物を片付け後ろ髪を引かれる思いで図書館を後にしてお袋が待つ予備校へ向かった。予備校へは俺一人で行くと言ったのだが無視された。どんなコースを選択するのか見定めて契約するためだそう。受付で簡単な手続きをすると現在の学力のチェックをするからと別室で英語と数学の模擬試験を夕方までみっちりを受けさせられた。結果？ 知るか、そんなもの。徹夜明けだから良い訳無いだろう。第一、簡単に模擬試験の問題ができるならそもそもこんな所に来る必要なんかないんだから。お袋は国立文系志望とか勝手に書いていたようだが、そんなもの無理に決まってるだろうに。だが、待てよ。あの子達、きつと北高に一年生で入ってくるよな、すると俺の名前が成績上位者に無いのは丸わかりだよな、それって激ヤバくないか？ 何処の大学志望なのかもひよっとしたら漏れちまうかも。

試験が済むと数分で係りの人に呼ばれる。コンピュータが吐き出した解析結果は、まあ散々だった。流石に昨日今日と勉強したおかげで中学レベルの基礎学力は概ね良好、高校数学は、ボロボロ、英語は……聞いてくれるな。社会と国語の模試は明日受けることになり、俺はコンピュータの指示に従ったコースとスケジュールで受講させられることになった。その日早速講義のDVDを借りてブースで受講して帰ることになる。講義は、確かに分かりやすい、こいつを信じてやってみるか。彼女達の応援が俺にそう決意させた。

せっかく可愛い娘と知り合えたんだ、今度こそ絶対にハッピーになつてやる！！！！

第三話 谷口君の春 第4節

隣の机では谷口が周りの中学生の女の子に応援されて珍しく一生懸命に勉強をしている。まったくあの腑抜けた顔はどうにかならないのかね。ともかく俺達の企みは上手く行きそうだ。あなたの教えてくれた人選もばっちり当たったみたいだ。俺と佐々木が同じ高校に進んでいた別の世界で北高に通っていたあなたは後輩としてあの三人を良く知っていたらしい。入学前に図書館と一緒に通って勉強していた事、年明けに北高の生徒を見つけて勉強をみてもらった事、そしてあの色白の眼鏡の子が谷口の好みのルックスであることも、そして留年してかなたと同級生になった谷口がその子に言い寄ったものの勉強できない人とは嫌いですと言われて奮起して勉強を始めた事も。

谷口は俺と長門が横で見ているとも知らずにデレッと向かいの子を眺めている。長門の情報操作は見事なものだ。閲覧室の他の人たちからはこの一角は書架スペースに見えているはずだ。谷口達からも俺達の居る机は見えていない。

昨日、かなたがプレゼントしたボールペンからの情報で谷口が図書館に来ることが分かり、長門がいつも自分の居場所を確保するために明けていた机を谷口と彼女達だけに見えるようにしてそこに誘導したわけだ。その後は完全に長門とかなたが書いたシナリオ通りに進んでいるらしい。

先日のクリパで森さん相手に見事なパフォーマンスをしたおかげでハルヒは谷口を準団員としてどうも認識したらしいとは古泉の論で、谷口が留年する羽目になるとかなりの確率でハルヒが不機嫌になりとんでも無いことが起こりそうだから何とか出来ないかと相談を俺達が受けちゃったわけだ。長門が単純な情報操作で谷口の成績をかさ上げる案は俺が却下した。かなた達と相談して出来上がったのがこの谷口ホイホイ作戦なのだ。

まさかこれほどまでに上手く行くとは信じられないが、あの世界で2年間谷口をハルヒのクラスメートとして、そして谷口が留年してからは同級生として谷口を観察してきたかなたの作戦勝ちなんだろう。

俺はひたすら黙って読書を続ける長門の前で勉強道具を広げて勉強を始めることにした。夕方からハルヒに呼び出されているからそれまでにノルマを済まさなくっちゃな。

今回はたまたま俺もこうやって関わっちまったんだが、長門は俺の知らない所で古泉達とこうやって世界の安定のためにいろんな事をしたりするのか？

「たまには」

読んでいた本から顔をあげ、長門は平然とそう呟いた。

第四話　　猫　喫茶店　鉛筆　　古泉編

今日は珍しく森さんに誘われて喫茶店で遅い昼食を一緒にすることになりました。何でも昨日は忙しくて今日のお弁当の材料を買い損ねたとの事です。珍しいですね。珍しいと言えば、今日はSOS団の呼び出しもかかっていません。朝比奈さんがセンター試験を受けてに行かれるのでその応援に駆け出されるとばかり思っていたのに肩すかしを食らった思いです。機関の調査では今日は涼宮さんは長門さんとお二人で朝比奈さんの試験の会場となっている大学の正門の前でお祈りをして居られるようです。

何故私と彼が呼ばれなかったかは定かでは有りませんが、きっと何か思うところがあったのでしょう。

と言うわけで昼食の用意も何も無かった私にとって森さんのお誘いは有り難い物でした。

今日のランチとかいう牡蠣フライの定食を頂きながらそんなことをぼんやりと考えていると、ふと目の前の森さんの手元に目がいきました。

森さんは茶色い手帳に鉛筆で何か書き留めて居られるのです。

「お食事中もお仕事ですか？」

思わずそう言った私は森さんを驚ろかせて仕舞ったようです。

「いいえ、何でもないんです。」

ちよつと食べたものを記録しているだけですから」

「それって、レコーディングダイエットとか言う物ですか？」

「一樹さんもお存じだったんですか？」

とんでも無い所を見られてしまいました」

「それは失礼しました。森さんはスタイルも良いし、そんな事とは無縁だと思っていたので」

「最近なかなかトレーニングに行く事が出来ないので、気をつけているんですよ」

「そうなんですか、実は僕も少々興味が有ったのです。

どんな風に記録しておられるのか、見せては頂けませんか？」

「じゃ、このページだけですよ。」

他にはスケジュールや仕事上の事も書いてありますから」

見せて頂くと今日のメニューが綺麗な筆跡で書き留められています。

「なるほど、この横の空欄にはカロリーを計算して記入されるのですか？」

そう言いながらふと手帳の表を返してみると離れていては気がつかなかった思いも寄らない可愛い模様が目がとまりました。

何と手帳の皮の表紙に猫のイラストが型押しされていたのです。

「もう一つ、森さんの秘密を知ってしまいました、可愛い柄なんですネ」

「あ、見つかったしまいました。」

実はこの手帳、頂き物なんですけど、気に入っているんですよ」

「そうなんですか、でも、森さんにこんなデザインの物を送られるとは、余程森さんの事を良くご存じの方なんでしょうね」

「これ、バレンタインのお返しに新川さんから頂いたんです。

きつと車で送って頂く時に見かけた猫のお話をしたからだと思います」

「森さん、猫が大好きだったんですか。　気がつきませんでした。

新川さんはやっぱり凄い方だ」

「そうですね、私たちの細かい事に良く気がついて下さいます。

そうやって、気に掛けて下さる方がいるって、私達、幸せですよ」

「有り難うございます、私も森さんに良いことを教わりました」

「古泉君は新川さんから良い影響を受けて居られます。

それは一樹君が新川さんを良く見て居られるからだと思いますよ。

それがいざという時のお互いの信頼の元だと思います。

あ、おしゃべりが過ぎるとせつかつくの熱々のフライが冷めちゃいます。

頂きましょう」

そう言つと森さんは付け合わせの野菜から口にし始められました。

なるほど、では、今年のバレンタインのお返しはカロリー計算に使えるグッズと猫のグッズも候補にしておこうと心のメモ帳に書き込んだのでした。

第四話　　猫　喫茶店　鉛筆　　ハルヒ編

気合を入れて早めに集合を掛けたら随分早く試験会場になる大学の所についてしまった。

尤も集まったのは私とみくるちゃんと有希の三人。古泉君とキヨンは自宅待機。キヨンが居ない分早く集合し過ぎたみたい。

「ねえ、みくるちゃん。寒いでしょ、時間ありそうだから、ここでお茶飲んでいかない？」

私はみくるちゃんと有希を引っ張るようにして喫茶店へ転がり込んだ。

ふんとコーヒーの良い匂いがする。

「ホットで良い？」

「良い」

「あの、私はホットミルクをお願いします」

みくるちゃんは鳩尾を押さえながらそう言った。

「大丈夫、胃が痛い？」

「済みません、昨日からコーヒー、飲みすぎちゃったんです」

そう言いながらみくるちゃんは鞆から鉛筆や消しゴム、受験票なんかを出して確認している。

「みくるちゃん、私たちの事は気にしないで良いから集中して」

「あ、ハイ、済みません」

そう言いながらぺこぺこと謝っていたみくちゃんはポケットから小さな紙切れを引っ張り出して口の中でぶつぶつ言いながら暗唱しはじめた。目が真っ赤だったし、きつと徹夜で最後の追い込みの勉強してたのね。それにしても手にした紙に書いてあることを必死に覚えてるって、何をいまさら覚えているのだろう？

「みくるちゃん、それ、なあに、まるで答えが書いてあるみたいね」

私がそう言つとみくるちゃんは手をバタバタ振って懸命に否定す

る。可笑しいの、冗談なのに。よっぽど余裕が無いのかしら。

「あ、有希、喫茶店の中では手袋脱いだほうが良いわ、それじゃ飲めないし、汚しちゃうわよ」

有希は慌てて手袋を外すとバッグい仕舞った。よほど汚れるのが嫌なのかしら？

私も襟卷きをそつと外してバッグに仕舞う。私だって汚したくないわ、キヨンがくれたプレゼントなんだもの。

私も来年はこうやって必死で受験するんだろうな。そんな事を考えていたらメールが届いた。この着信音は、キヨン。

『無事着いてるか？』

朝比奈さんに頑張れって伝えておいてくれ。

ハルヒもまた風邪引くなよ。

だけど、どうして今日、俺は自宅待機なんだ？』

もう、分かっただけなんだから。あの馬鹿にはちゃんと教えてやらないと駄目なのかしら？

『キヨンは今日は家で猫の番でもしてなさい、

キヨンと一緒にきたら、みくるちゃんを真剣に応援できないですよ、馬鹿』

これで分かるだろうか？

『俺だって真剣に応援するぞ、何故馬鹿なんだ？』

『馬鹿、キヨンが着たら、キヨンの事が気になるから、みくるちゃんの応援だかデートだか判らなくなるでしょ』

本当に恥ずかしいメール打たせるんだから。

「そろそろ、時間だから行って来ます。

涼宮さん、顔が赤いです、風邪、治ってないんですか？
待っててもらわなくても良いです、私、頑張りますから」

「何言ってるのよ、私達はみくるちゃんと、鶴屋さんの応援に着たんだから正門の前でお祈りしてる。

大丈夫、さ、有希も手袋して良いわよ、行きましよう」

ああ。びっくりした、メールしてて時刻になってるのがわからな

かった。

さあ、気合いれてみくるちゃんに念を送るわ。絶対良い成績を取ってもらうんだから。

第四話　　猫　喫茶店　鉛筆　　朝比奈さん編

喫茶店を出ると私は涼宮さんと長門さんに大学の校門で分かれて地図を見ながら工学部の建物って言うのを探しました。うーん、判りません、泣きそうです。足早に歩いていく他所の学校の制服を着た生徒さん達に押し出されるようにして芝生の直ぐ側で立ちすくんでいました。

さつきホットミルクを飲んだおかげでお腹は温かいけど、耳も鼻の先も痛いほど冷たくて、場所も判らなくて……

悲しくなつて足元を見たらふさふさとした長い毛の白い猫さんが私の足元にすり寄ってきました。ご免なさい、わたし何もあげる物を持っていません。

しゃがみ込んで猫さんとお話をしていたら頭にゴンと何かが落ちてきました。

ビックリして見上げると、そこには黒い学生鞆が、で、その先には鶴屋さんが呆れた顔をして私を見下ろしていました。

「みくるつち、心配したよ。」

猫ちゃんと遊ぶのも良いけど、今日は試験が優先っさ。

さあ、もう時間ぎりぎりだよ。

ダッシュでついておいで」

ふえん、鶴屋さん、私、道に迷って泣きそうでした。

「やつぱりそうかい、あの地図、みくるつちなら上下でも見間違えたんじゃないかと思つてそれらしい場所を探しにきたんだけど、マジで迷つてたのかい。」

ほら、急ぐによる」

私達はしんと静まりかえつた試験会場に大慌てで駆け込みました。もう黒板の前では白衣を着た怖そうなおじさんが注意事項の説明を始めています。

幸いな事に私と鶴屋さんは同じ教室、私の番号の席は鶴屋さんの斜め前でした。

大急ぎで受験票と鉛筆、消しゴム、鉛筆削り、この間買った文字盤の大きな腕時計を机の上に出して並べます。あ、鞆は椅子の下に仕舞うんですね。

かじかんだ指を結んだり開いたりして暖めていると解答用のマークシートの紙と問題用紙が配られました。合図で試験が始まります。私は一生懸命覚えた番号を順に書き込みます。升が一つでもずれたら駄目だからって言われていたので必死です。あ、問題用紙を開かないと、怪しまれますよね。

そうです、実は私は最優先コードと一緒に書き込むべき番号の書いたメモを昨日の夜受け取っていたんです。一晩かかって今日の試験の分を一生懸命覚えたんですけど、忘れちゃいそう。

五分ほどで全部のマークを埋めると、私は問題用紙を読んでみることにしました。

何だか今年の試験、難しそうです。そうこうしている内に私、寝てしまっていました。

ガタガタという音で目が覚めるとみんな席を立つところです。

私は鶴屋さんに引つ張られて教室の外に出ました。

「みくるっち、大丈夫かい？」

目も真っ赤だったから大丈夫かねえと思ってたら、本番中に寝ちまつたから本当に心配したよ。

気分が悪かったら医務室に行こうか？」

あ、大丈夫です、ちょっと来る前にホットミルクを飲んで眠くなっただけですから。

鶴屋さんは私のほっぺたを両手で引つ張ってフニフニし始めました。

「みくるっちは本当に赤ちゃんだね。

ミルクで寝ちゃうなんてビックリさね。

ほら、コーヒークャンディあげるから。

今度はちゃんと起きておくんだよ」

はい、すみません、ご免なさい。

でも、私、そんなに赤ちゃんみたいなんでしょうか？

ふえん。また自信がなくなっちゃいました。

第五話 冬の遊園地

今日もハルヒは長門と一緒に朝比奈さんの付き添いとしてセンター試験の会場に行ったらしい。どうやら昨日の朝比奈さんは試験中に眠ってしまったにも関わらず当てずっぽうでマークしたのが凄いの中率で結構良い成績だったという嘘の話だ。

ハルヒによると自分と長門の神がかり的な祈りのパフォーマンスが類い稀なる霊験あらたかな効果をあげたからに違いない、今日も頑張ってくると朝っぱらからメールが来た。

休みの日だろうが人が寝ていようがお構いなしにメールをしてくるのには甚だ迷惑しているものの既に悟りの境地にある俺としては頑張ってお祈りでも不思議な踊りでも何でもやってこいと心の広いメールを返してやって、さあ、目が覚めてしまった、どうしようかととりあえず顔を洗いに洗面所で少々眠そうな自分の顔と対面しているとビビビビと時計が震えた。かなただ。

KANATA・M< 先輩、戻りました。今日のご都合、大丈夫です。すね？

ああ、ハルヒは朝比奈さんの応援に行っているから呼び出される事は無いと思うぞ。

KANATA・M< クリスマス以来逢えなかったから、今日は付き合ってください

かなたは地球の生態系の調査して故郷の宇宙に報告するんだとか言っけクリパが済んだ次の日から出かけていた、新学期が始まっても戻らないので心配していたが漸く仕事が片付いたのだろう。

かなたと二人で出かけるって久しぶりだな、何処に出かけるんだ？
KANATA・M< ナイショ、でも近くです。あと30分したら迎えに行きますから用意しておいて下さいね

元気にびよこびよこ飛び跳ねる嬉しそうかなたの姿が目につく。

ああ、待ってる。

俺は寝ぼけたお袋に訝られながらコーヒードパンを大急ぎで流し込むと身支度を調えた。

やがて時刻が来ると玄関の呼び鈴がなる。玄関に出るといつぞやの真つ赤なスポーツカーが待っていた。中にはサングラスをして大人っぽくコートを羽織ったかなたが乗っている。

かなた、久しぶりだな。大丈夫だったか？

「はい、大丈夫です、冬の生態系のデータを集めるのに手間取って遅くなりましたけど片付けました。じゃ、車、出しますね」

かなたから調査の話を色々聞かされる。どうやら海洋調査までやっていたらしい。

「元日、涼宮先輩に注入して頂いたナノマシンは一応ちゃんと機能したと思うのですが、ちょっと心配なんです」

そういえば元日の夜、藤原の襲撃の後、ハルヒの記憶を消すとか言ってハルヒにキスしようとしてひっぱたかれたんだが。

「あの時、涼宮先輩に『好きだ』っておっしゃったでしょ？」

「それはだな、いきなりで又ひっぱたかれてはたまらんから……」

「二人つきりならそんなことされないですって。ただ、あんな事言われたら女の子なら絶対忘れたくないと思うものなんですよね」

かなたはにこっと笑ってそう言った。

「じゃ、ハルヒがあのこと、本当は忘れていないとでも」

「残念ながら潜在意識には残ってしまったかもしれませんが」

かなたの言葉に一抹の不安がよぎったがその後、楽しそうに話すかなたの姿にその不安も薄れていった。

暫く走ると名前に聞き覚えのある遊園地へ到着した。こんな寒い時期でもやってるのか？

「大丈夫、野外スケートリンクも有るんですよ、一緒に滑りたくて来ちゃいました」

入場ゲートでチケットを買ってかなたに引っぱられる様にしてス

ケートリンクへやってくる。

「はい、先輩、皮の手袋。カナダで買ってきました、お土産です。怪我するといけないからして下さいね。

私のもお揃いです」

柔らかかでびつたりと指にフィットする、随分良い手袋らしい。貰って良いのか？

「判りますか、良かった。選んだ甲斐があります。

大きさも丁度良いでしょ」

スケート靴を借りて履き替えると俺はかなたに手を引いて貰いながらおそろのおそろの氷の上を歩いてみる。うぐつ、結構難しいものだな。

かなたは後ろ向けに器用に俺の両手を引きながら滑っている。暫く滑って大分感じがつかめてきた頃、ど派手な声が聞こえてきた。

「ぎゃー、リュウジ、放しちゃ駄目だって、ひえー、転ぶ、駄目、私滑るのは絶対駄目なんだから」

「タイガ、お前、運動神経良いんだから、直ぐ滑れるようになるって。

此処なら平らだから滑って落ちたりしない、大丈夫、ほら」

どこかで聞いたような声だな、何処だっけ？

「先輩、どうしたんですか、お知り合い？」

うーん、あ、そうだ、年末、インフルエンザで行った病院で見かけた二人連れだ。あの時もメチャクチャ騒いでたぞ。

「まあ、面白そうな方たちですね。

私達はちよつとリンクから上がって休みましょうか？」

ああ、慣れない筋肉を使ったから明日はきつと足が痛くなるな。

「先輩、勘が良いから大分滑れるようになりましたね。

滑れるようになったら、今度、川の上がスケート場になっているところにお連れします」

何処なんだ？

「リドー運河、カナダです。」

世界一長い天然のスケートリングが冬には出来るんです。
そこで一緒に滑りたくて……」

それで今日は此処に連れてきてくれたんだな。

「はい、有希姉さまと一緒に行きましょうね。」

あ、涼宮先輩の事考えてたでしょ

かなた拗ねちゃいますよ」

あ、すまん、でも、あいつも一緒に行ければいいなって。

「行けますよ、絶対。」

だから、勉強も頑張って下さいね。

あ、でも、有希姉さまも私も留学に付いていきますから」
分かった、夢はデッカク、だな？

「はい！」

第五話 冬の遊園地（後書き）

次はちよつとした短編

かなたへ 第十九部 ハンドメイド・ジュエルズ Handmad

e Jewels

<http://ncode.syosetu.com/n8028>

m /

です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5397m/>

かなたへ 第十八部 冬物語拾遺

2010年10月8日13時58分発行